

[課題演習抄録]

自分の考えを英語で伝える力を高める外国語科の授業づくり —Small talk に焦点を当てて—

原 口 明 莉
Akari HARAGUCHI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：Small talk, 外国語科

1 研究の目的

文部科学省(2017a)の考えをふまえると、これからは誰とでも英語で話すことができるコミュニケーション能力が必要だと考えられる。しかし、文部科学省(2015)によると、積極的に英語で自分の考えを他者に話す能力を高めることが課題だと考える。自分の考えを他者に話させるために、Small talk に焦点を当てた。文部科学省(2017b)は、Small talk について「あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること」と述べている。教師が Small talk で手本を示し、児童が教師を真似して話すことにより、話し方が身につく、自分の考えを英語で伝える力を高めることができるようになる。と考える。

Small talkを取り入れた外国語科の授業を実践することで、児童の自分の考えを英語で伝える力を高めることができたかを、児童のワークシート及び授業記録を基に明らかにする。

2 研究の計画

2020年11月24日に福岡県A小学校6年生を対象に『I have a dream. 将来の夢を紹介しよう』で授業実践を行った。これらの授業実践における教師と児童、児童同士の談話記録を分析するとともに、ワークシートの分析を行う。

3 研究の内容

(1) 事前アンケート

2020年10月28日に福岡県A小学校6年生を対象に外国語科の授業に関するアンケートを行った。

以下が、アンケートの結果である。

表1 アンケートの結果①

問① 英語で、友達と話したり聞いたりすることは好きですか？あてはまる答えに○をつけて下さい。				
好き	まあまあ好き	普通	まあまあ嫌い	嫌い
22%	26%	33%	4%	15%

表2 アンケートの結果②

問② 将来になりたい職業について誰と英語で話したり聞いたりしてみたいと思いますか？○は何個つけてもいいです。			
友達	家族	先生	その他
51%	29%	9%	11%

「まあまあ嫌い」「嫌い」と答えた児童の理由は「むずいから」「英語が読めないから」等、英語を話したり聞いたりすることに困難さを感じているものであった。また、「聞いたりするのは好きだけど発表するのが苦手だから」と、皆の前で話すことが恥ずかしいと思う児童もいた。これらの結果を踏まえて、今回の授業は①自分の将来の夢を話す練習時間を十分に確保すること、②全体の前で話すのではなく、多くの友達とペアになって話すこと、③将来の夢を友達に否定されないよう、友達の将来の夢を聞いたら必ずポジティブな言葉をかける、夢応援カードという、「You can do it!」と書いてあるカードを渡すというルールを設定すること、の3点を工夫した。

(2) 授業実践

この授業は、Small talkで既習事項について確認したあと、自分の将来の夢を多くの友達に英語で伝え、将来の夢応援カードを集める授業であった。将来の夢応援カードとは、将来の夢を聞く側が、話す側の英語で話した割合に応じて渡す評価カードである。英語で話せたのが半分以下だったらオレンジのカード、半分以上英語で話せていたら銀のカード、全て英語で話せていたら金のカードを渡す、というルールを設定した。ワークシ

トの児童の回答は表3、表4の通りである。

表3 ワークシートの結果①

① “I want to be～.” “I like～.” “I want～.” “I can～.” を使って将来の夢とその理由について紹介できましたか？			
よくできた	できた	できなかった	記入なし
50%	20%	0%	30%

表4 ワークシートの結果②

② “What do you want to be?” を使って将来の夢は何か、友達にたずねることはできましたか？			
よくできた	できた	できなかった	記入なし
53%	17%	0%	30%

ワークシートの2つの項目とも、約70%の児童が「できた」「よくできた」と回答している。このような結果となった要因として2つ考える。1つ目は、Small talk である。筆者とALTのSmall talkで将来の夢について話し合う手本を示した後、授業で使用する英語表現を黒板に貼り、ジェスチャーやアイコンタクト、発音等、話すときのポイントを全体で確認した。Small talkで手本を示したことにより、児童は自主的に前時で使ったプリントを振り返り、既習事項を確認していた。また、ワークシートのめあての欄にジェスチャーやアイコンタクト等話す時に意識するポイントを自分で考え記述することが67%できていた。Small talkの内容は表5の通りである。

表5 Small talk

筆者：Hello.
ALT：Hello.
筆者：What do you want to be?
ALT：I want to be a writer.
筆者：Writer! Why?
ALT：I like books.
筆者：Books.
ALT：I want to write story.
I can read many books.
筆者：Many books Wow... Nice.
ALT：How about you. What do you want to be?
筆者：I want to be a dancer. I like dancing.
I can dance. I want to NO.1 dancer.
ALT：I see. Thank you.
筆者：Thank you.

2つ目は、将来の夢応援カードである。将来の夢応援カードを作成したことで、児童はできるだけ多く、友達から金のカードをもらおうとたくさんの友達と将来の夢について話し合っていた。表6、7は児童同士の談話記録である。

表6 児童同士の談話記録①

C1：How are want to be.
C2：What do you.
C1：あつ What do you?
C2：I want to be a cook. I like cooking.
I want to delicious food.

表7 児童同士の談話記録②

C1：I want to be a nurse. I like people.
C3：Nice.
C1：What do you want to be?
C3：I want to be a hair dresser.
I like arrange hair.

C3はめあての欄に、「Eyecontactを意識しながらお話する」と記述していた。そのため、C3はC1と話す際にできるだけ原稿を見ず、相手の目を見て英語で話していた。また、C1は始め、表5のように“What do you want to be?”を話すことができなかったが、友達に教えてもらったことで表6のように話せるようになった。C1は事前アンケートで英語が「まあまあ嫌い」と答えていた児童である。C1は授業のワークシートの「今日の授業の感想を書きましょう。」の欄に「前よりもっと質問が上手になったけど、まだできてないところがあるので、次頑張りたいです。」と記述している。また、事前アンケートで英語が「嫌い」「まあまあ嫌い」と回答していた児童の80%が今回の授業のワークシートの項目①②について「よくできた」「できた」と回答している。

4 成果と課題

本研究の成果は2つある。1つ目はSmall talkを活用することである。Small talkで教師が手本を示すことにより、既習事項や、ジェスチャー、アイコンタクト等、話す時のポイントについて確認することができた。2つ目は、応援カードのような友達から評価される物を活用することである。友達から評価されることで、分からないところを友達から教えてもらったり、友達からより良い評価を得られるよう、より多くの人と話したりするため、英語表現が定着できると考える。

課題は、児童同士の談話記録から、“r”と“l”の違いなど、発音に対して指摘している児童を確認することができなかったことである。このことから、発音指導にも重点を置いた指導過程についても今後考えていきたい。

主な引用・参考文献

- 文部科学省 2015 平成26年度「小学校外国語活動実施状況調査」の結果について 文部科学省
- 文部科学省 2017a 小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 外国語活動・外国語編 文部科学省
- 文部科学省 2017b 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック 文部科学省 130